俳諧一葉集

一

芭蕉翁裳日附合文章茶話俳諧遺法消息也一代之風藻雖不可考干茲所謂親親於古書收藏於他庫也悉以梨焉

俳諧一葉集

前後篇九冊

東都中橋北槙里
一具菴藏梓

序

俳諧者非常色而中格妙門也世人妄謂一時戲言綺語也豈支然耶蓋能致知而達理之常變氣之順逆固守自得遊心於太虛則諸默作之無有不善故

棄名利而造之靜安可獲焉誠
意而為之身脩家整學不外乎
此矣昔從芭蕉啟西風雲從風
靡今雖其流間有淆者泝源者
亦不少也屬者社友集錄翁一
期所嘯以為小冊以便卷懷可
謂夜行珠矣傳曰法不自顯弘
之在人湖子其人乎是為序
文政十癸歲回月
仙波僧正書于蒼蔔
林中之谷神齋

俳諧一葉集序

花千かくらんひすまん玉姫のあくをきけ波
生とゝいはるものゝつれの歌をよみさうけるとゝの
宮千きゝ人千よまさを詩と俳諧とにさつゝと
ゝのうゝしそもゝ芭蕉庵桃青翁八三十ゆすまうれ
ゝろう俳項猫ゆ千つゝて発揮しまさひそうゝ
花角う的様ゝ俳諧の座をきゝ深して七情よく八ゝ
ゝゝひをゝふゝ作ゝう外く渾沌を活して性を千
古人千と代ゝの雅風を物して古今集のゝゝの以

歌にもはら杜律山家集の格をしたひて貞
享の初年はじめて狂句に絶妙の源を発し人
情を述る事尊し文章記録にそなへて能に
道の師とはいふなれば其後生およそ四海にあふる程
なる丈艸を始め杉郎が桃青くも孫才門弟
子国々にちらして其風を唱ふる人幾千といふ
数をしらねども其志を呑て胃をあらひ
大意に通じたるこそまれなれ程にふれ斗筲の量殊
に遠きに生れ師友とうとく此たぐひなれ

我れひとは古学院とはなりて祖翁の一世にくら
ますらを捨し物を中右にして学に志しくを
を受たるやと発句より消息述懐の志けきる玉敷
ゐて集めし只ひとつ葉の一といふ手あらひに俳諧一
葉集と題し封さしたるものとかれは訂し
ちまた西すき非なり是まてやましく村肝をきさ
みてゆかれし舎を道家につゞれ八三年ましあふ程
いふ読にひとしう友人坎窩の函底をとるあさ
全をもとろみてあかれのかけにはもて大事は

[illegible]

[illegible]人の心法を於さいふ子自然を[illegible]水子

[illegible]し[illegible]拙を[illegible]ひ一生を[illegible]利

[illegible]やすくそ[illegible]けれ[illegible]俗法を勉さ来て俗法を

[illegible]さて其のち子俗法をいふへしとを[illegible]

乃[illegible]をうてちなの物こ[illegible]諸[illegible]

文政丁亥仲秋

山辟来湖中

凡例

一巻首の部寛文延宝天和時代の分ハ四季とも千

帖の内ゆゑ元禄の分ハ[illegible]

手蹟をもて義経季の分ハ巻末に出す

一同物き書を尺とする句成ハ行御の[illegible]成ハ俳友の発

句を[illegible]人ふ[illegible]和千物[illegible]

[illegible]ハ[illegible]の事[illegible]

一附合の部ハ延宝より元禄まて年歴をくく

次第に[illegible]

一同二百三百成八五百七百貫の地八千貫の末に載

一同古集大うゝ寛文中宗房と号う延宝天和に至さ

桃青或ハ芭蕉とよゝ貞享ゝこハ翁と号う信て

芭千俳ゝ

一文の新屋白の頃ハ不猫地に越人の此ゝることゆふけし

為千ゝ中ゝ蝶掃の設翁の作ゝ物し然

れとも文集ゝ蝶に有ゝこハ入ゝハみゝに有に

載ゝ中ゝ記ハ未怡に載

一文暦今ゝ三ハ辞俗のたゝひのゝに有ゝ

紀行なゝの中に在に物ゝ精ゝ有ゝ文物き

物もゝゝく記に拾人の考ゝ

一遺稿の新祖翁の俳ハゝ一計の載れてゝゝ

載すゝ志のひに載に岸

一同加の書ゝれ弁ゝく此ゝ有ゝ物ゝ大

同小ゝゝと和千服ゝ人ゝ重複ゝ

載

俳諧一葉集 发句春々部

古學庵佛子 編
幻窓 湖中
坎窩 久藏 校

寛文延寛天和季中

夜訓の注床作文庫よりなるの書
貴白ものや芭蕉 桃青 の文体
糸年を棚へ掛てやはるとひ
手や人々とられていりとうう来
歯朶の紫もちひの筵
かいもんとつくりうう春の雲

もて来つる是こそ春玉うつる玉
椒春〻大九哉春と云〻
元和歳功
餅を寄て祝ひ給ふ原の子枕
季吟勅撰集の歌
和泉の法とふや出ちの八重咲
叶梅手生さ神さと明り色し
古代の梅や穀倉波の二年 哉
梅うやさら〻おちらぬ京右卯
志津一夏れ風をすりぬ志の弱
梅 梅 さて寄こうれ女うふ
杉風寄恵

さ〻けう〻二月中旬之川菊
去年八さやそ〻すきれよ次郎月
和らの毒へつひの扁れまかひう
夢よすう〻白魚やとう八酒ぬ色ふ
石川加賀生の今年山店を奉法れて
屠てんとして芹の飯炊をて泉川まて
杉本さ〻れ青泥坊屋の芹和ふ志を
千代の俤さ〻ふ
奉る白魚の鄙 嘯 跡す芹の食
平まんや墓る芹焼を入てと粉
さう〻れる梅手すて引泉を乳
梅咲や白の 椒本のふ如

竹内一枝折りて

春ゝ自へ梅花一枝のこゝさゝる

ゆゝしき事和面くさゝくゝ　梅　鮫

餅　ゝゝをしゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ

ゝふひゝん菩提の縁を尋ねゝ

ゝゝ亀ゝ價ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

菅　揚ゝ貧ゝゝる女　探ゝ　ゝ

内裏鮮人形　天皇の御字とゝ和

若一所八仲の内　二月

貝よゝゝる風のまゝゝ和　ゝ　ゝ　浦

鮫　石ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

揚けんゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

山吹の花の蕚のかゝらゝ点ゝゝ

夏ゝ知酒聖貧始覺孫神

蕚ゝゝゝ世ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

雨降ゝれハ

学展の風ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

蕚の蕚ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

蕚ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝゝ山ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

蕚の先ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

紅毛ゝ蕚ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

蛇　横　吹ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

糸ゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

吹風を尾花の[illegible]
艶なる奴も見るや後毒のさま
文をし[illegible]
和漢[illegible]人[illegible]
[illegible]人や[illegible]山桜
花のもとにて貴白[illegible]
[illegible]
[illegible]風を吹出し[illegible]
[illegible]花や[illegible]三[illegible]の山
[illegible]
和[illegible]いのち七十五年[illegible]
[illegible]

先和や宜竹[illegible]尺八[illegible]の雲
[illegible]
氏[illegible]生[illegible]や[illegible]の桃

道寺の時

[illegible]友[illegible]や[illegible]
李白芭蕉を路る
[illegible]桜の二[illegible]

貞享元猟年中

[illegible]や[illegible]米五升
[illegible]
[illegible]の松[illegible]

山家遠き

雑堤の月冬の夜の鐘ばかり遠のき
伊勢の海の家も来るまで代の長
嵐雪の亭に宴する西月小袖をぬぎ捨れば
雑中の姿あれば似るもの多の中
雪の降波をしまんと四方の木にて
風無しの夕べ遠の屋ばかりゆけ
初の尺をつしてく
二月十七日ぬるうハきし紅花の東
角の太郎の家にて見れハ仏蔵の
ちちをとをとをとをとをとをとを形
敵無しとしみじみとあれたふまれ色かなと

京にうまれ和子事をとりて
こをなしえしもれ人いまもの長
御殿の堂高庵子事をむふ姿三
はるを冥して影四日
大津絵の筆の法一色の何 仏
人と人ぬきとかの境のうつみ物
事しかの様子見をしるさるの面
えうえ田舎のなとうえしけれ
蓬莱子ばかりの仏事の和俗
ゆかしに行くゆうむ友もこの月
古物子蕎麦 梅ゆくをとをとを
一とをとを一度つハうち蕎麦の敵

蒟蒻をうゑかへて実のいわの葉が

風麦序

きさらぎやさくらみてる社路山うれ
大き枝やしら社をうて一うきみ
きをあれや名もあふ山の新雲
西角をみ渡て近江や関　月
うゝひとの公ゝ蔵しる枯うゝ
おぼろ

夫るゝ蕉ゆる竹はきやしら社
等や　梅のうしら社　百歳の　春
うゝひすや鶯よ蕉すう　梅は先
あゝ人の等の戸と吾はゝまゝ

もゝてゝ手元しゝをのゝ
ひゝ筍をもゝ作ゝた垣穂
社梅さゝうゝ
あゝ
の梅ゝ
無ゝ

筍ゝ手ゝ
伊賀のあゝ
梅　烏　ゝ
訪山居

梅ゝ
蹲ゝ

紅梅や天あを〳〵つくる玉すだれ
梅折て樽に挿す枝すゝ南
山里に万葉ぶくし梅ぶゝき
高良
四方八方の中に〳〵うめの香
卓袋亭月待
月やたゝや樽のしけゆく小山伏
山象
手洗うむ手つきく梅は仏ゝ外
伊賀の山家にふ物あり去
ゝ浮むれて菓とす石ゝ伏
本ゝあるに黒色あり

長あるゝその実みな梨野也これを去て日本料に石炭と称するいなり
伊ゝ式ゝのみ殘ゝ〳〵きんいと
めつゝ

長ゝ自〳〵ゆほる梅の花
一ゝも梅のゝゝ松をつる花
ゝゝ伊の伊ゝ知人ゝ伊ゝ
式ゝみちの松ゝ尺ゝ伊ゝ
梅ゝ伊ゝ計ゝれハ
又ゝゝ藪の中ゝ梅のゝゝ
伊賀ゝ
お高良ゝ一ゝ梅の色

細代氏新うの梅
樹の末そ多ゐやうに古和梅の色
黒ものよ梅の形強を生乃敏

園女亭

咳羅のおくまのゆう小多梅

九州う来武行餞句

梅さくの蕾まうらの梅のようう汁
まもた知る蕾きうきのふ梅梅
かうくまぬ卒きの梅梅

古来う浴くも人のうをいもつ宇
蔦葛のさ一みさまし梅の来

紅葉狩八さ者の二月ふさうう

一国長の浮と千父梅九子ゆ方へ十つ
うう

梅の長さ むう品一字あ名結し
うめうう千の川とらのもう山後うれ
蕾さ千ちむく梅や花のようう後
蕾さ人ものうう行うう もつ
迎ものや 梅うう 休 の松く
二月末ちう見梅う剃髪を醫
門う入を蕾う
汐女う 弧のうう一 う豆小
仲塾う
邦頭や物ものうけ行新人像

貞享五年きさらぎの末伊勢に詣づ
此御白洲の土を踏て既に五度に
及び侍りぬよはひのくれゆくまゝに
千とせの日かげもくもらじと尊く
光りも増りまさる心地してかの西行
法師の詠を思ひ出てかたじけなさにと
しのびて内外の御前にぬかづきつゝ涙を落す
被之宮はるかに拝み侍る
何の木の花とはしらず匂ひ哉
裸にはまだ衣更着の嵐哉
嗒山旅店
陽炎の我肩に立紙衣哉

陽炎や柴胡の糸の薄曇り
伊賀新大佛寺
丈六に陽炎高し石の上
枯芝やまだ陽炎の一二寸
野州室の八嶋にて
糸遊に結びつきたる烟哉
入かゝる日も糸遊の名残哉
百舌や枕の木かげいろみえず
木曽の情雪や生ぬく春の草
雪間より薄紫の芽独活哉
二月堂
水取や氷の僧の沓の音

伯耆

寺の和や蕎人ゆうし寺の陽
寺風やきたるくてて紅葉屋
奈良

春風や人ゆくつる三笠山

笠寺奉納

笠寺やもゆる紅葉も寺の面
十一月廿九日

法師ゆ茶子仏ゆ清水ゆ
寺面の木下ゆつる雪ゆ寺
くるる面や蕎を伸ず茶の花
赤坂

不性ゆうゆ起きれし寺の面
寺面や蕎ゆうゆ川柳
寺面や蜂の巣ふ屋根の海
在原寺

うゆひゆ魂ゆ残ゆ蟬柳
狂歌ゆ蕎ゆ
もちしのうゆ柳ゆ芽ゆ
古川ゆうゆ芽ゆくる柳ゆ
吹ゆ月ゆ蜂の居るやゆ
弥杜國

笠の紙ゆ柳ゆうゆ柳むゆ
柳寺ゆ柳ゆ

かくのまきて柳しらけ見る様一の谷
まの西にはまのうみにのぞみてやうしなれ
さうかたにまがりて蔵見えなり
うすまきおもしろき中ゝ清く此
おこをやみおけれハ
八九百こえて南律　様うれ
塒
塒もかよふおとなの花そする
世すさのゝもしのなも念佛やうす
誰もなくもくもやものゝやう
玄武の七弟七生仏菩ハ八字様
諏訪山注
櫨の木み花そかなハぬすてくなれ

湖水驛望
かへさ紀の杉なもとよりく鐵まても
達古人
高ふ河の中に浴さる様この乱
山さらら尾ふくもの気狗らり
毘沙門堂のもと豊国王天の紫苑も
うれしかうしおきまくへまうへ多る是舎
六河原むそのし通照佐西のうち紀無を
いらひし苑頂山ましのうちや月の糸
紀さ枯うし藤の林中として思ひそうれ
て始まり死し
観音ハ甍見路つきなのやう

七夕　新尺の物語の面

物は自切

花すゝきおつふ竹に結れてひそ友雅

鶯の巣と尺くらもの紫うれ

つゝ流

花の雫　藤の上　神の法華の

ゆすハ橋木とその和合の元本のいと

とゆくきのふハ雪とをて雲ハ雪さ

本ふ流に生ゆ一樹の雨のしいのお

手ゆすハくしとといいくして弥生

奥者の濃をくらけぬ

さひしとや志はゆくはゆくはあすふ

伊賀の上野宮の和歌

その撰　杉しもくもそよそよ

笑みとす　桜の世よう　和伏くう

京清と花尺の雪ハ七号情

掠丸子のお壁

さんくしのるゆ　ひわす　撰のふ

駅竹花と絲をいれて松の思いと毎

うけきハ

花をとゆよ付しめ弥やせる年

回亭より旅立けるる

世　伊とくに　とり　紀いふわう紙外

雪のうくに立付ける

芳野うち櫻尺きうひの本を

詠門二句

詠門の菊和上戸のちきりきん

酒のうちかくむる勝の花

櫻 粉きくやゐ五里六里

芳野

菊さうう山そ日波の紅葉けり

きくくくハもの上ある角和加

菊尾村うち

菊のうけ繪ひうる紅ねゐ

大和国をゐ郡一ト菊塚の群をうう

よくのもハ菊うしハかまうしうる

嘆のけきいとく敷ある加の神のみさ

ちゑ人のはさうふくさ侍くけんい

敷尺うし菊うけ侍くけ神の良

文考ニ東行餞句

吐うう櫻をよもう五逸一具

尾張の門人より清酒一樽木曽の猪

酒菓一鉢おうけるを人くうき

むうう

飲ものけうう菊ひけうきを二升樽

去の夜ハ櫻うけ侍ゆ志ゆ

菊尾ト櫻うう門人ト共角鼠をう

高のよう櫻と仕うう や菊の海

示門人

[illegible]飛とや人[illegible]

[illegible]山の雪[illegible]し拾[illegible]画[illegible]琴の[illegible]

[illegible]もや[illegible]おとろく[illegible]の[illegible]

信[illegible]吟[illegible]

[illegible]の[illegible]おくろ[illegible]や[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]も[illegible]の[illegible]

[illegible]仰ぬ[illegible]白[illegible]

白[illegible]の[illegible]

[illegible]や[illegible]の[illegible]寺の少[illegible]山[illegible]

[illegible]山

[illegible]の山二丁の[illegible]れハ大悲閣

[illegible]川の[illegible]

[illegible]舟[illegible]柳原

[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]の嵐の家

[illegible]に人幕

上野の[illegible]

[illegible]の[illegible]小唄の[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]ハぬ[illegible]

古寺や[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]きしてもの[illegible]ゆふ[illegible]

山家

[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]

歌[illegible]の[illegible]　山桜

二尺の岡をあみて

[illegible]

後[illegible]亭

我[illegible]

伊賀[illegible]の[illegible]の[illegible]

八重桜の[illegible]

一里[illegible]

扁[illegible]

似合[illegible]

[illegible]亭扁木子亭

[illegible]

[illegible]

四方[illegible]

後[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

上醍醐

笛まよふ山中僧るらむ山桜

古郷のうみの国中十三里の辨を
もうて

春雨や二葉に萌ゆる茄子種

此たねと思ひこなさし唐辛子

芋種や花のさかりに売ありく

木白無行

そらけ引きちや行ゆくの桜麻

仏光勝岸寺

香ぞ衣手仏光にか桃の実をよ

御人八辨 まで咲の桃の花

尚白と浪華へ下る

只一夜桃千ありる木情の和

吉中の桃千余すむをもとをれ

舟あしも休む時あり浜の桃

そらけむ旅の宿ひなきもいさゝか
も心すさりて露をかむりのしれハ
住る庵をおきたれ人に譲りて
おぬし人の書をも見しむまぬ跡をと
持る人にありさ飛ハ

草の戸も住かはる代ぞ雛の家

重三

青柳の泥にしだるゝ汐干かな

おとろへや蜀子吟ぬ海苔の物

光憐

暫くは海苔を忘れ老の春

海苔を里う詠うて

海苔汁の子除夕くそう海苔椀

あけやの白魚きらるる一寸

常陸下命子法を射遣の人今

ひかのるは白魚遣てあわう絵作

坂子国讃

きくくもや黒くふ貝をあく法の弼

よ野をしる舟

飯貝や雨子海うて回みし少

吉法や陸孤こもむる社ち

陸るを貝ふ船を海ち和

ふるれやしみつきく猫の恋

田家

麦先子や つ麦の猫の妻

猫の恋牛ち麦の闘のわちる月

膳所へ用くく人子射く

猿の まつ尺ち馬よ猿の妻

山猿来く何や海ちの妻

悼呂丸

当海ふく恋の情のすみ墨料

よく尺法は苔も咲かきくの糸

團角扇子讃と云ふ事を
おもしろき事は扇子に代ねひられ

菩提山
山寺のすさまじさ告よ松ほうし
持ものゝ手秋の接穂や山ざくら

茶店二句
涼しさにけふも干飯さく女
茶をのみけけも見[illegible]雀の声

陳菴の信宗波旅に赴れけるを
古葉只あかれなくに陳この夜
茶中や枝のきしもつみ時雨の聲
あさの[illegible]ぬひとつ

雲往く[illegible]休ふたしけされ
ひとり[illegible]の[illegible]のあし

古秋くし
父母の[illegible]の声
[illegible]

荘子画讃
もろこしの胡蝶[illegible]蝶
物あやめ[illegible]蝶

[illegible]木亭
蝶の[illegible]

越よしの家をたずねて

画讃

旅ごころ　やはらぐ　ばかり　ぬくく　なりぬ

雨河

ちるしらゆき　山ずみの　ゆめの　ねもし

画讃

山吹や　宇治の　焙炉の　ゆきかよひ

山ずみの　やどの　ゆきまに　ほころびぬ　枝の　梅

大和路　郡山の　城　丹波市　とおりぬ

ちるさくら　ひのくれぬ　ちるさくら　ぬかの　光

朱ちらす　夕日　なれば　ぬれぬ

ゆく　春の　二月　なかばの　ころ　や　春の　花

夢　ぬれて　ゆく　四谷　ゆく　ぬれて　履

時　入　や　一里　ばかり　ゆく　小山　仏

世　節　ゆく　ゆく　ゆく　第　舎　の　画讃

春　さく　ゆく　ゆく　ゆく　や　ゆく　花　家

二条　和

藪　精　門　を　春　の　ゆく　ゆく

遊就尚舎

物　の　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく

ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　追　ゆく

尚　ゆく

行　春　や　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　海

田　家　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく

入あひは殘るきさらぎのころ
殘つる雪里そ白をのゝ雲
　雪消水惜きゆくまゝを江の人とをみる

寄霞

ちらぬ花ゝ陳の梅をおりて
　自然自賛

春ゝ雨やとしゝ生の玉
えるやはゝ秋のゝ紅
四方ゝ山ゝ菊もさゝらぬまゝ後ゝれ
梅ひとゝ枝おゝくゝ咲ゝ急

上野の春

春ゝ雨ゝ白織きて洗ゝ梅ゝ女
孤石ゝみちゝ行ゝ遠ゝ
むゝく越ゝ陳の春おゝ

迎春和尚を悼

咲ゝ梅ゝ花のゝ春ゝ
紅ゝ雪ゝ春ゝ
まゝ白ゝ雪ゝ殘ゝ

椿説

雲すり漏れ落しそむる藍
怒龍の袈裟して緋の筆の心隈り
まつしりれハ
香や梅香や花香の管とて経
敵波の雲居る佛頂禅師の小庵
を訪ひて
菊さらす来て　棚さのしまる　庵の柴

発句夏之部
寛文延宝の初年中
時やあけ耳のすゝみの倚りさきに
対馬ともつく方表付もつて尾　花
口まゝ風来油有秋比ちゝしおに
戸の口年寄れまつれ　郭公
黒焼釜さつて粽くりゆきに
志け百ままつや傍りきすゝみ年
子規正　月の　梅乃花さくり
清く咲む耳千金婦く郭公
炭漬ふし湯る浴や傍とくき朱
菖蒲生り軒のいさよひの　　蠣　饅

見まうく荊をつゝむ傍らの竹
茂る草似よりや似たる妻の顔
時々いかるき御所河舟の底
五月の雨笠捨柴の羽井いつまでそ
さみだれや浮物なきや月の魚
鳴きしや耳をすゝめる梅の雨
五月雨も瀬にさみぬみだれ川
さみだれや龍燈うける青古郎
きみしく蜂や此笠奉と待しも草
こゝも三河むしきよき夏の額へて
樓の宿や花ちるに煙の其糸酒
右和八仙の内　二句

秋や江戸此度や秋しる麦の秋
汗をやよし池師の筏小沢
只一浮す尺とをしや夕たちさん
ゆふ顔の白く柳の後架子銭帽よりて
松風生じ名にしとききよりつらす調して
題にふれは
いつや秋よきに布ぶ蝉衣
雲の河豚有臓も世月の鰹
莫しききひゐゆかや底さらす
落柳よりらく見えぬ名たみ
閑やいつの秋下ぞふ玉な楽
梢ちしはさて蕭ゆう蝶のかし

小松の中山

いのちなりけりとは笠の下すゝ

不卜の母追善

あもけなく袖とはしらぬ時雨

甲斐文の移住とゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

貞享元孫手中

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]佛のあれゆふ[illegible]

清仏や鼓を金[illegible]

始祝寺

[illegible]

日光山

[illegible]

[illegible]尺の滝

[illegible]

[illegible]

甲斐大山中一百

山路の順　[illegible]

[illegible]

青柳や芽解の糸の縺るゝ春

逸素門

いとゝとゝ縺るゝ春や柳いろの枝

正月十五武蔵おもかげ川にて送り来る鮒の

入くし川端まで送り来る鮒の

白さいふ世のつゝしみ

春の縺るゝとゝうにつゝむるれ

春の縺るゝやあるゝとゝ陰ゝ庭

悼大顛和尚

梅ゝ花ゝ和尚のふみ

世角ゝ毋五七日追善

和尚のふゝとゝ梅ゝすきゝ

うのゝやゝゝゝ梅のはゝひゝ

尾張ゝ東武ゝ下ゝ時

牡丹葉源くゝけ蝶の為詩

枇杷新芽自画自賛

宮ゝうゝぬ家や浮世人の花の窟

大坂ゝ

蕗ゝ芽ゝこのゝゝゝ旅ゝひゝれ

山崎宗鑑居ゝ跡ゝ近傍の宗鑑

ゝ塚ゝ見ゝれかまゝけゝとゝ

ゝゝを田びゝゝゝゝの中ゝ

ゝゝゝゝすゝゝゝゝ蕗ゝ

鳴海知足亭

うらつきき我千歳目の松もむかしかり

帰華

さらいやうき風をとりて
こうれとや笠もかけて夜雨識

大猷の碑を拝す　日光御代参勤を
まふて處従よりて石田も何某と共

篠の露篠ふくの汁し萩くの秋
黒山萩の萩りや風もみな筋

次庵

ほとゝぎす穀を笛きく木下宿

雲岸寺

木つゝきも庵ハやふらす夏木立

幻住庵

先たのむ椎の木もあり夏木立

別旧友

二またに別れ初けり鹿の角

子規啼や黒戸の浜庇

橘やいつの野中の郭公

鉄拐峯に登りて二句

須磨の海士の矢先に鳴か郭公

ほとゝぎす消行方や島一つ

兼尺の瀧

時鳥うらみの瀧の裏おもて

みちのく一見の桑門同行二人那須

此上のたしなみにて五錢銀出石尺
むかしのかけ候へ十両のかね八
先此もまとめてみよ
菅家やきさ人の涼み居にけり

野次郎にて

騒ぎ横手より出むかひけり郭公
時鳥声横ぎるや須磨の上
一声の江に横ぎるや杜宇
京にても京なつかしや時鳥

蝶夢より

わがきます大竹藪をもる月夜
時鳥鳴くや五尺の菖蒲やは学

さし竿書きて扇に

鳥は刺しも竿や朽けむ澤もききし

仏籬として

田や麦や中にも市の時鳥
ほけ経の中やまた鶯も杜宇

不卜一周忌琴風興行

時鳥鳴きし跡や古き硯箱
なりきたる声やしの花にいでにし
木隠れて茶摘も聞くや郭公
鳥羽殿の古き松こし時鳥

すまの此あたりへ入て

須磨寺やふかぬ笛きく木の下の句ひ

菖蒲会

柳のもとに菖蒲をうゑ侍りしの日

菖蒲ふかやすらへ

とんとうと棟やあやめ花くも

白けしやあやめの水の咲つゝ

鶯杜園

白きまに雨もく樗かのうみ

次慶

海士の兵まいたるやけしの花

岱水亭

雨ぬれし異ふとゝもよむ菖蒲

芦雄

同一枝植うゑたるを植うれ

奥州今の志しの川より出る

あるのひとうしやまいよ菖蒲ふ風の吉

早苗ふも系ふ

みちのくの名ふ

の紅ふつゝきまつ

白川もこゝめぬ

聖廟筆彩るの芳屋を都かの陽関は

かり故人千遊まくし

風流のこゝめやれくの同植喜

志のふの歌思ふの里ゝのやあやめの柳の長話

とゝ方二ゝとゝ方ゝ百ゝ世石八菖女の

田の石に朱子か碑の文字まくら山
草すみれも雨ふり立るさへさみしく
ちえて今ハ皆草に埋れて石の面ハ只さ
末の八字そる風情もなく人の侍るも稀なり
うち青苔さへ茂りのしけれハ
さまへしらる手え文や苔のしきの小楷
尾張の旧友に贈る
世を旅に代かく小田の行戻り
荒田氏の亭
柴つけし馬のもとりや田植樽
昼見れハ首すし赤き螢かな
草の葉を落るより飛ぶ螢哉

木曽路の旅思ひたちて大津にとゝまる
瀬田の螢を見に出て
此ほたる田毎の月にくらへ見ん
上林三入亭
螢見や船頭酔ておほつかな
松の下火きと木々の音や花のやと
秋を誘ふ行脚にとゝめて
家居せし始のちひきをと戯之
ますすけ将不の手さうひハ京ほさ
る所しらぬうてる深艸の里の旅
寝をひやるまて今ハ何なるらしの事よ
笠をかさしひて人の世の草枕まてのあはや

明生角力

行合て本名を名乗る時

うゑ人の姿をうつしたる本名の魂

格のもとより行ふ仏法本名の格

屋敷の山家

曇さうなみ立の風もまたうすく

清風寺

さびゆくかひ風ちらしの雲の

井の音も格ふ山の月きよし

小夕焼うつし

うゑうゑや夕月とうゑ人の果

ゆくひ陸の川原の花を立ぬとて

夫多や行の子鼓を老を帰

木国寺行脚の

暮ゆくを井格るうたみのと笠

行脚名

寄の人乃尺分ぬ花や野の家

又うゑむ小枝の中ゑ川松魚

うゑ人を破ゆくむ

頭金をいきん鮒松魚

やみの格や家をおとして帰る

走る川を行ゑ文をつのゑ

帰ゆゑ行ゑ格ゑとゑるもの

大津湖仙寺

此宿にて[illegible]しぬ扨こゝより
[illegible]川をわたりて佐谷[illegible]
[illegible]を経て[illegible]と人のいへる佐谷宿
武隈の松[illegible]
[illegible]より松を二本三月越
みしの松や[illegible]の終に耳よつく
俗古[illegible]いさふくられて五月雪を吉家
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
病中自嘲
髪生て容顔[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]山や枝[illegible]一里 [illegible]
夏[illegible]山や[illegible]く里[illegible]食時分
[illegible]時[illegible]時[illegible]時おうす 海苔
子[illegible]
[illegible]山や藪を小[illegible]の[illegible]き
[illegible]
[illegible]山を出羽の[illegible]
[illegible]の住まふ牛[illegible]大塩の旅店を訪
[illegible]
[illegible]の[illegible]ハ[illegible]の[illegible]
正成公像

鐵肝石心丹人之情
[illegible]山や樹の雫
[illegible]石 上
[illegible]
[illegible]
[illegible]赤く雫実
[illegible]舟[illegible]
清風亭二句
[illegible]紅の色
[illegible]て紅のされ
已百亭

やとりをむ藤の枝にあらしふき
黄枝の如く移ふものをうしなふ
ことを悔みて
もろき人をたとくむ色なる紅
秋ゆふ人を志きをくれ
うき秋をさひしうんとう
飛鳥の城にすきよりうんと
鳥栗山にて　我をきゆしし
樫絵をひしくやしし姫の春
立石寺にて
志川のうらわ宮志入きみの春
芭蕉迅東

やうて弘法寺きハ足しし姫の春
鶯高うしろ角の像
寺の中をうしろよりて山墨子
そもむかたてしもまみうあの猶
よりて
関扇もて姫の手人のうしろ白
書香寺にて
鶯の鳴の枝の屋宇紅
ひとの屋子栄ひ浦ひ長子
ひとの屋子栄ひ浦ひ長子
ひとの屋子栄ひ浦ひ長子
雲田の雪田の海文の寺住子
ひとの屋子屋扇をうるの森の山

あのたいや駿河の国の孔
ゆかしきを千載むかしを思ひ
出る人の和歌を詠て
る古歌を訪て
瓜作る家ゝあれなとゝのまうみ
河内柏原寺にて古木長歌千瓜
花をいけて下に学徒の群集を
て花生ずる雫を掬面を
瓜の味ふ
岩橋の
鵲橋山の松の下納涼して長夜の
魅をなぐさむほと

山のけや多を喜ん瓜をそなへ
花と寄と一度に瓜おさうる
白俣滝にて
夕千ゝ和歌つの千瓜のそなへ
初吉葉
吉来うの棲
和歌千ゝ
物屋
ゝ
乗千俣乳二
瓜の波むゝ
出雲寺

夏の秋や崩れて冷し和
さし殖ゑ[illegible]ひの清水
岐阜山を言
堪能や古井の清水先問む
飯沢の泉の井市屋は八幡宮
近くまうで南北一方あれば
泉を結ぶちひく同じ石清水
結ぶうさやの園ひく志ゐか
沢庵 二句
月を見てや物思ふ秋の夜
月見ては月見ぬ人を思ふ
明石秋伯

蟬鳴やそこの夏の月
夏を歩く小鮎子 明石 多賀
夏の秋やこの夏の石清水
夏の月沖の沖もて赤坂や
晋の洞明をうらやむ
夏ふかくに屋や苔の花やたの秋
秋野をの人の住家寄
山を絶もうとく入るや夏雲
井筒武水楼
夏の夏や沖の月うふ浪の上
夏月物入る窮句ふものを見
住んと言ふみさいるやはれに

人しいなく山の本うけよ庵を後け
至ることなけて
又たたいあのゝ世川の手遠 餘
ゝゝ月ゝ四ゝ三ゝ屋ゝ吟ゝ
世ゝ月ゝてゝやゝうゝ出ゝき釣舟外
如宮主ゝ寺ゝ
家居を繕ゝ
ゝゝとゝゝくゝ扇や雲の峰
葉の色ゝ月を雨ゝまゝとゝ和雨の鼻
枝ゝくゝて安ゝう
ゝのゝゝいゝ川蘭れゝ月の山
六月や 峰ゝ雲れゝく 山

月や朝八時ゝも 餘
清涼や 浪ゝ高ゝ杉紫
みふ月ゝふゝ鶏やみの笠ゝ
かゝゝ行ぬ河原ゝ
杉風の義堂の名 杉 すゝし
石川丈山の像
風ゝ涼る羽織
書ゝ
舟ゝゝハゝゝかゝみゝ羽織外
小倉山学家ゝ
松枝をゝめゝや風の葉ゝ
湖月亭 二句

さゝ原みやゐのあけはの
御やゐのさゝ原を吹むすぶ
嵐　はるかに見えて所々の
砂ゐの中に新やゐ殿みす
　　瀧殿
わすれすゝ水和の中山さす先
　　玉ゝ多ゝ
　　ゝ
　　ゝ
　　

笑ふなと海に入るうなみ川
象潟や雨に西施がねむの花
汐越や鶴脛ぬれて海涼し

きさらぎはいまだ雪ちらほらとまじれる
花の上こぐ舟をかりて酒もるとて
もしらず酣満寺のまへ
波をしのぎて
夕晴や休て涼む波の花
小鯛さす網干の
川中に根本をさらす蚊すだれ

冥加のほど納涼とて名月の
ごとくにて川中に床をもうけて
夜ふけ風のみ絶えひとつ女八幡
ばかりの男八角形長三尺
しく法師者人もまれ
法師のてしこの
川風や蓮の
妙翠寺影田家納涼
飯ばかりかしら張をやみまし
雲巣寺
涼しさや蓮の枝の形

野水新発

[illegible]

東武より上りて人しを尋ね

[illegible]の毛膳そうし[illegible]

砂山亭

[illegible]

[illegible]

大津木節亭まて

秋ちかやそ[illegible]の[illegible]和四[illegible]

亭主

笈頭伺出頻

みえそうやれもそ[illegible]の[illegible]

長貞亭

海ハ[illegible]

松角

[illegible]

松一[illegible]

野明亭

清流の[illegible]

[illegible]心の時

[illegible]

秋虫損　拓植物園

なとゆゑの四季をとられ、

さみしれて家の中なる松ぼくり

雪着く先宮　彼方石ふみ

歳人会信州にて

ゆくゆくやとくるの春ゆくさき弱舟如

実盛なるべし

汗の毛手を立ふるむ形見哉

我白秋ゝ新

寛文延宴天和年中

強めるの猫手足ゝ今ゝ多の秋

秋寒ゝ耳を暮ゝ秋の風

秋来ぬと巣

夫雲ものゝ一ものかゝ人の川

角弓や　墨の一義　男　七夕

七夕ゝゆゝ　名所八体の内　二首

名所八体の内　二首

星合の舟や　弱ゝ　就田川

八彩や　ゝの　拓　立　ゝ　厨斗

憤光社

蟋蟀を聞て昔の秋影すゝ[illegible]
三ヶ月や秋の夕の[illegible]
月をとゝのゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]
俊てすゝ月俊[illegible]
足[illegible]
六[illegible]
古郷の安[illegible]
[illegible]
[illegible]
西[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

秋のものや戸の口やとうす雨
うけもすると水生木やもみち舗
武蔵野家射信寄を先とし　政以
歌先とすると詠ず
名月のもとや　五十一ヶ源
寺くしと名月の粉や墨の山
源氏物語　江戸もまれ小山の月
木を伐てもの口ふくふの月
有蘭　草　菊　宣　止
臧主や肩を揺かうす　云
武蔵野や一寸ばかり赤の蕎
蕎の赤うこや　秋風の口うつし

久うすぬいろはをうれて火中れ
後家の秋物のはをれをとめう
をの秋をもうこうこ秋のうれ
命のうや安百の秋を堺　町
茅舎の感
芝蘭ぬかしてゆ響を雨を秋れ
とうこうこ赤ばかりはの尺る芦　百の
ひれうこ北廉をうや牡丹白
秋露を出ハ月下の栗を穿
百葉すこ裏途を秋や秋の蕎
秋のうれ男ハ信あものうれハう
花本輝　禄　意　百　こ南

[illegible]秋や軒端の萩の散ちる

重陽

さらつなぎ[illegible]ゆく菊や折本を

近江路を通る折[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]れもしらるる雑のひきうれ

真享元禄年中

[illegible]

初秋や海も青[illegible]の一みとる

[illegible]秋や[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

七夕やそこの秋は係旅

吊雨星

[illegible]

地蔵寺にて

七夕や秋とさもるさしめの秋

富麻寺にて

信濃路のかいく所の松

[illegible]

[illegible]

[illegible]

更科紀行

[illegible]

[illegible]

閉関

[illegible]

[illegible]

和歌浦

[illegible]

九月の末ちかき時雨の小枝かな

[illegible]

物書て扇ひらきくうれうれ

[illegible]

秋深し[illegible]

栗鼠の[illegible]

ひやしくと酒をふるまひて座敷に
寄合い
稲妻をくるまとやみの秋柳
宮敷賀
ひけをもて稲妻をやり川ひろうか
成知識のけさまをくるまとなる稲大庭の蓑
とのわいくまをくるくる
いれつまをて悔しぬ人のたてさよ
稲妻や宮の方ゆくを丈位の家
おのるまるの妙を結骨とよ箔鉢をか
まくる能すらおとと過て業基の望を
みちうまをとに生業のたとふれたるか

時雨ひをてとふしあやかの句誘を
枕として旅をつくるをやのさるの
も只は生涯をを乗さうものし
いふ雨やうの家うすきの秋
より此西行庵をて
家とくし試て俳をすうをや
画讃
あり月の雲雀と
月良をるる
ふるもうや書付けさむ生のなか
二人の陽をし
秋うと拾ふやくをのつ西

嵯峨庵をく一可逢某方丈八仙の代りす
すの仍り〻士峰代を掛て蓬天をお
さえ日月の彩を門をひらくのとむ
うふ雲さえれおもしろして笑京を変す
詩人を句を畫をます才士文人を之を所
画工を筆を拾ひけるを貌姑射
孔巧の神人の〻を供をよくきむの
を画をよくきもの
雲雨方に消 時 百家を畫て〻
霧消雨不二を見ぬをおるしるむ
秋海棠 西瓜のはつを咲り〻
玉川のあを手おを色てををふ

ひとりくとあるけ一や女郎花
くさ〻何の一の像
むり雨を消年りおふく笠的旅
丁上の吟
花をさを木槿を百年詠れり
高田醫師綱川青庵尊
某 樹千いり紅のをを年 枕
かが屋千入
玉鉾のまやをけ入をを後海
少松をいふ雪ををて
をほを〻き春やおを松に萩をを〻き
萩 五や一秋をそやをを山の光

歌小考

めれくゆくへもなしや雨の萩
　　徐々庵
浪の音や小見子やすらう萩の秀
　　いろの宗
小萩ちるまきのほのかのひかりつき
　　画讃
ちらくあるをこれもなぬ萩のうねかな
ひとりの家子越女と家うら萩と月
萩書言葉のこゝろをうたはしと
　　八々
秋いろやさとろう子牡丹の萩

敷賀寺宗院

門子入ハ萩除子芙蓉白ひうれ
　　悦書和尚の法室やうの秋さ
　　ものを訪ふ芙蓉惜芙蓉やうく外
　　茶店うゝ
芙蓉の色や墨の つきたになるよりて
　　越女の画讃
枝よくしなりうくこうく芙蓉外
きうの雨のおちさし芙蓉の下まうれ
芙蓉いろくしの花はまうく外
此寺も後一ゝ
　　秋草莽

芭蕉そゝ〜角力取草の花乃高

侍坂付斗従て宮ゝを詩きて

落葉八まゝに行てもゆく山路かな

三り月の地を枕ほろし落葉哉の声

知足の翁亜天翁の新老を賀す

ふるかや森ふる宵戸の栗

秋中の一日氏寺迄て書状の題を出

名ゐ月や秋をいろ〳〵の紙子哉

かゝ賀玉をさる

無坂り山うゝや川の玉祭り

多賀山

玉あるゝふる棧坂の名ゝり

尼妻良り分ようゝとかく

教ゆゝぬ身とれ枕ひそむ秋

業泥やをゝて世ゝ玉まつ

甲戌の秋大津に行くしをこのうみ

許より消息きれ毛八四里ゝ隔て賀

舎をいとゝ恋ゝしし

家をこれ枕千白野す雀ゝ

後骨の説

夕風や雲掛打ち撫ゝ多棧

ゆゝきけ秋父母さくすゝひ取

許ゝの画平

晴角力いかゝ上ゝ年栄の食

[illegible]けんとて句を書てる道
[illegible]の絵手

秋のいろ[illegible]の味噌蓋[illegible]
[illegible]川うさや結[illegible]
[illegible]を[illegible]育やみそし出の[illegible]
[illegible]千[illegible]いひ[illegible]入やきし[illegible]
[illegible]習す[illegible]むき[illegible]

[illegible]田の祇社[illegible]
むさんやれかふ[illegible]のこのきり[illegible]
白[illegible]めく 秋 の[illegible] やきり[illegible]
さひ[illegible]さや[illegible]千[illegible]る 蕎
[illegible]の[illegible]に住[illegible]秋の[illegible]

けるる[illegible]れ友[illegible]の方[illegible]
みの出れ言を[illegible]末よ[illegible]
晴 玲 や 取 つ[illegible]
[illegible]秋[illegible]業出[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]田中の[illegible]
[illegible]や[illegible]

田家

かうけし田向の[illegible]や里の秋
[illegible]の[illegible]の[illegible]
田[illegible]酒家
桐の[illegible]

[illegible]の用ゐ[illegible]や[illegible]の峰　鄭
稲すゝめ[illegible]の木[illegible]けや迎雲
青くて[illegible]ふものを　蕎　椒
かくさめて[illegible]業汁[illegible]
丈風[illegible]あ[illegible]も[illegible]
木曽塚の旧草[illegible]
[illegible]の戸をきれや[illegible]
椒　[illegible]
[illegible]柳[illegible]
金[illegible]
[illegible]掃[illegible]や　[illegible]金　[illegible]　椒
画讃

[illegible]や[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]

冬瓜や五千かさる良の形

あるの音

芋洗ふ女西行なら八雲さす哉

山寺や京鼠喜撰迫火

加賀の火手鮮や浪の白もきい

嵐雪の四国渡る舟

旅鳥二百十日や船支度

あの声もしきりに秋の雲

秋風や水の果風の

三方角やさわるまで傾る笠は寒

小松の中山寺

[illegible]

[illegible]

三十日有余千とせの秋を抱寒

[illegible]

[illegible]

[illegible]

高尾根本寺にて二句

月さやし梢を雨を拭ふ雫

寺に泊さまに鳥鳴く月天の気

田家にて二句

鶏のこゑや稲ほうけて月を尺る

いまの世や月やの里は焼畠

大胃根城祇院にて

何事ぞ北天を不動も似たる三つの月

あはれ中一と夜絶えて高の月

蛾眉山にて

佛や蛾ひとつ浮き月の友

いさよひもまさに更科の影うれ

善光寺にて

月うけや四門四宗も共ひとり

仲秋の月を更科の里姥捨山慰の

うつろひ物ひとつ月の月もまたあれば

あるうち長月十三夜千年の秋

木曽の渡しまさにあるべき所の月

清水の橋とうとうと流るるかたつ

清水の納涼の橋ひとつ二条河原もみの

と言ふ所にて

あさむしや月尺の流の月を舟

月尺をよの玉江の蓮を苅ぬ先

湯の尾峠にて

月をみるとてみうみわたいもの弥

鶴山

義仲の宿営の山の月出て

音信の物語

月清し越行のもとの砂の上

敦賀港

月やかほ月もあれまくめもなく

演

月のみる雨かもなくく

仲秋の夜つるの海に遊ぶの船

うらうらと氏湾の波みく佐る我

玉のやの波を入てゝ歌をまへと就

波下さ月を義をゝ引抜ふたりをまと

ゆき

月いりと殘れる三日月。海の宿

木角亭にて

殘れ家や月と蔦とも田三反

斜嶽亭

戸を閉ゝ月あるゝ山ゝ伊吹とも花

千もようももとゝ見弥山

の浦ゝ

千年にに月もたのまし伊吹山

伊吹の雪又云ゝ歌をまゝ紅ゝ

千歳の男の伊子ゝ物語をゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

名月や海に出て行く舟の月

名月や海と空とを一架のうけかたし

名月やうつくしの森の上の月

清良

月やうつくしの森の上の月

笠のいろはきけハいな　おりからかもも

幸子このまきものをうつくしけ

東山住る僧を訪て西行上人社

よりとものみかし山家集このきこれら

ひろのまつ　ほうしやもくさある

茅庵の秋をつゝみしらる

宗の戸ハ月やうつくしの孫化坊

石山寺清水寺を

橋掛ハ月のみかしの月ハ

加賀の長歌

うつのたひ起てうつくしき月の七つのふ

淀川

名月や門をさし寄る淀の

柱ハ松風柏風の情を割て住ひた

曽良盛水の物数寄を使ふ名

月のうつくしきをとゝ

義仲

うつくしき義仲の月の

淀川の末を知れとうつくしき

舟をさし

川とも此川にや月の友
いさらゐひとつ河つる関のとまめ
嵐蘭翁七日詣
尺にやとまりとまりの三りの月
東隠僧
入月の残りとれの四隅つき
盛水亭
新待や菊の岳社する豆腐串
伊賀の山中にて二首
名月の花の尺にて孫とけ
名月や林の寺や田の墨
義仲院

とく賀茂より此の月も十六里
住吉の市より
和賀とく分る月尺うれ
嘯止亭題月下送別
月まもや狐惜る此の所
女松亭
秋とやとつく雲月の新
名月や池をめぐりて松さすり
山寺に小の高やきの月
わこの松に池角乱影を盗の月
かけとやとい思ひいつ弱もの
桟やいのちをうむ芋うつ

芳野於泊

雑寺くゝ春よゝ咲きそめや竹うつす
春の雪ゝ小斗そくく雑うれ
雑ひとハ藤おふ袖をきめされ
よ里ら旧里ゝ
隙ら や 翠 ゝ
鹿牧春ゝ
雪雑ゝ牛 四五本のあしれ
砂の雪の ゝ
雪の葉ゝ
思忻ハ家
よ砂ゝ

清家雪を踏ゝ
母の白髪とわかのみゝ
ゝゝハ消れ流ゝ
秋草やまゝら敷 秋の雲
松けやしゝ 木葉の風ゝ付
松草 やかゝれゝとハ 松の敷
草 物やあふふれゝ久 叫雨
思水ふ楚
敷ゝ ゝ本の家 拾ゝや
木ゝの橡ゝき 人 ゝ
李内玄 本の二人子
蒲藤ゝ 柿とうれ き子の花

元野宇翠亭

里ふるさと柿の木持ぬ家もなし
赤い柿や一口ハ喰ふ猿の つら

曙田森波一の休亭

祖父と親をるよけ庵や梅みのん
梅や 侍 梅 白 の 庵 さ し
何 咲 き 小 家 ハ 秋 の 梅 こ の け
秋 を 師 宇 陸 ふ 矣 ふ 菊 の 家

草葺の雨

起ゆうる勇行のうしまはけと

左柳亭

ちやくさりんちうしたの菊

蓮池のうち和尚さま菊をあそばすきの六
就山の富をひらきりみを千酒は
飯行をまつあく狂はなをれ
よふくう粉粉をまふ波手洗のすらわ
あくまをあと我
咲きよひのいろ絵のうち野を飾る菊
山中の温泉うしも
山中や菊をたをるぬ宿の月
如行亭うし
疲ふのうちうちを菊のつわみい
菊のおか花て ひらくハめくのこい
田舎手作る

稲こぎの跡をめてくしいもの大
堂田の何うし木院醫師の兄の孝を拓
れしにうう菊を作て酒をもて
あそれうる殖業八弦の中菊志をすす
いと芽しりを絶ハ
墻を未く砌をし吸菊の輪の青
九月九日乙州う一樽を携来られハ
菊の戸やり菊うくうう作し菊の酒
菊の戸やの戸社やのうむの後の菊
八丁堀にて
菊のもと吸や石屋の石の苔
大門通をうる

琴の音や古地庄の宵戸の菊
国安亭にて
きくきく社月にうたて足る落葉哉
京良にて二句
菊の香や奈良にて古寺佛生
きくの香や奈良ハいく代の男山
うくの香ハ
菊の香にうくこの世界の白妙
生玉にうくうる菊を立て
菊よりも菊良と浪花の宵月夜
菊花の頃
おもひ〳〵ハ郎うる菊のさかりかな

江上の破屋をもとゝ言

秋さゝ[illegible]を心[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]

秋寸とゝ都て江湖を[illegible]古以

情於[illegible]

[illegible]を[illegible]人於[illegible]秋の風いのち

義[illegible]の[illegible]ろ[illegible]秋の風

秋風や藪もそよけも不破の関

[illegible]ゝ[illegible]みゝ大根すゝし秋の風

一笑追善

墳[illegible]ゝ[illegible]け[illegible]秋の風

[illegible]

赤[illegible]と[illegible]ゝ[illegible]れゝ[illegible]秋の風

生[illegible]の[illegible]の[illegible]秋の風

[illegible]

石山の石[illegible]秋の風

猪[illegible]

桃の木[illegible]秋の風

中村をとゝく

秋の日伊賀[illegible]

妹[illegible]の[illegible]栗の球

[illegible]

ものいへば唇さむしあきの風

[illegible]秋の[illegible]

秋風や[illegible]

伊勢紀行の跋

西東あそこれさまたまへ秋の風

悼松倉嵐蘭

秋風やものおもはせし蘭の枝

野ざらし紀行を送る

尺とれば芋の葉ばかりの秋の風

芭蕉翁追悼句

乳麺のいとゞ焚こゝ芭蕉翁

麻布神前

此松の実生きし代や神の秋

菊花

菊の花ものいふ木曽の秋

さらさらと秋よりはひとり蟬

稲の穂

さびしさや行方も知らぬ海の秋

白行菴

旅病や宿借うるふ秋の山

小名木川桐葉亭

秋千をあそぶゆふべの小松川

旅懷

此秋も行て帰るる雁

車庸亭二句

味ひ蕎麦を歩崩しうる蝋の丸

ゆくもしら雲を踏みて新蕎

きりぎりす人し寄宿いやゝく朝起ハ
やはし
やもしらむ秋の名残や寄るゝ
本国寺にて
卯月をぬ旅宿ゆめ覚く秋のうれ
いく秋はせきてて開生まかれう
深川の庵
芭蕉の葉葉ゝさらし秋のうれ
枯枝に鴉のとまるゝ秋のうれ
雲竹の像
こちらむけ手もさひき秋の暮
所思

此花やゆくゝ人に秋のうれ
り秋やあれ引まゝ之有蔵
哈はふさ尺わうれゆく秋そ
内宮ハるをさきてかやの近宮を
をこのみ行て
たゝまくこゝ乳神ゆ以ぬ佛近宮
ゆく秋のあるかのもの　や青宮　柳
せく柏亭にて
秋深ス隙ハ多ス寂ス人ス
清水の茶店にて茶ふ
柳風の柳をのこして秋ぬれ
行秋やまを庵けゝる寒のいゝの

考證

惟仙翁

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋の[illegible]

[illegible]八井伊家の郷[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]八今[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]山社釜[illegible]

茅舎買水

[illegible]若く偃嵐[illegible]

小舟炭や[illegible]

[illegible]

[illegible]寺[illegible]

山[illegible]

白炭や[illegible]

張宝の説

[illegible]

[illegible]

浪の[illegible]

[illegible]相[illegible]を園の[illegible]

耕月亭[illegible]

[illegible]上戸[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

山々猫鈴うちふりやまのいぬ
雪の日や窟仏の御形すゝき　猪
歌天八幸　呉天うちまもる尺あぶる
雪の朱猫　能うゝ　さゝ　ゆゝ　む
ゆきの鈴ひゝうち千鶴をかみえうう

名所八体の内

松島や雪か去ん鶴の名ゝうう
る代をうつす天の原ん作うあゝも海
うまれつる業鈴手つまむ事の雪
此うゝ鶴ゆうう手の隠ふん
乾　鶴や　伊の　辰年　毛尼人
ゆうゝうゝ　ゆゝ　ゆゝ　手の雪

一休うち出ん　ゆゝ　ゆゝ　むゝ　ゆゝ　のいわ

貞享元原手中

元禄辛酉初冬九日寺事蔦国遠
辛酉の富を祈年月のうゝけ
仕うて八世須八幡ゆゝうん久ゝみを
蔦もゆゝゆゝ射休手酉とうる心ゝう
貞八展辛酉のたゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ
形秋蔦を御　さ　人　ゆゝ　ゆゝ
れうゝうゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ
蔦のこゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　展の元

相撲のめ一花海のうさうられ八重垣く
と手〳〵あとをきり作とに
はな海手に芋雑炊んを野面
芭の作うまて野面とゆひく
笠とをかを手とし〳〵うこ八ゆと
芋状ゆもし〳〵うこ枕の赤く
野面ゆくや舟の帆張手取付て
雑炊は赤〳〵野面うは屋れ
人の沒へとしめてゆかく
うつ野面和の富を赤野面れ
とやこふ〳〵といふ作田のむく
らのやとハうれたくとも袖を

ちたしきておとま宜はやたく人
船人と赤ゆかよれ蛍和野面
一尾船の生〳〵重〳〵不この重
伊賀山中
和野面蛙くいたみのをかきし
四里の道すのうう
きくうやの田のの株の黒光作と
義流雲外高雅おう作ゆ新
作り木は庵をいきめる野面うれ
高田雑場市の家ゆ
高の〳〵うたをかのうする野面れ
丁寧〳〵野面の大井川

好六尊

[illegible]

新稲のお初くさやきしられし

山路へ井出のなるしられし

苔花

人しを哀[illegible]やうなくとも

支濃尊

口切や堺の[illegible]

鶴一声や古宮[illegible]の雲

[illegible]

志のふさへ[illegible]餅ふやくるし

雲の後蓑とくひさ

[illegible]

[illegible]

芋[illegible]

[illegible]

骨[illegible]

大根引

[illegible]

[illegible]

消息

口上

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

竹の画賛

[illegible]

耕雪寺の楼上の人の句

[illegible]

三河新城の家士若林氏宅

[illegible]

鳳来寺の茶屋にて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あらぬとはいふとも
世かはらじ人をとやゆ枯木の枝の長
大津をとる
三尺ばかりなる木にふれ
月の深きこころはいとはるる枝の心
をまもりて
ゆるるる涙や
当寺は百年余の間千
既千百年の間
加の婦は曰竹樹ひとつの去石をもら
とおもふに木を物ゆて深樹
受行くられハ

百年は寺きを
を比丘僧酬
拭ふ可の
蜀錦頃きを
消息
佛意僧や神の
詩学葦
月意や月も
月意又よ
金屏の松は
鶴酒壺
酒ものの福をたひわる間の一四芦

[illegible]の時のくるみをおろされよ生のうち[illegible]
[illegible]
[illegible]や田螺のみそ汁　義[illegible]

樽七ツ市まで[illegible]田舎[illegible]を[illegible]
四里を[illegible]
[illegible]人あり家僕[illegible]水木の[illegible]
[illegible]を告げ[illegible]
奴阿飯の功を[illegible]陶侃の故奴
を[illegible]
物八[illegible]
上者の人[illegible]
[illegible]むこと[illegible]

[illegible]
先後く梅を[illegible]後の[illegible]
[illegible]川亭を越ひら
[illegible]手伊吹を[illegible]
防川亭にて
[illegible]を拾る梅[illegible]義尺る[illegible]
越日梅人亭[illegible]
[illegible]仙や白き[illegible]
三河にて白雪と[illegible]二人[illegible]
先桃後の[illegible]
[illegible]白し桃[illegible]
[illegible]義の[illegible]友[illegible]

式里を浮ひとしふてと八幡宮の院の法
門の養子を日の紙をもてよりて法
美ならつ里人のかう侍るを見る
法文をきくあるもしるし侍れ
ともいとさのしとおぼえ侍るまに
梅花を見ぬ人はなみの里
おもふ人を花入 梅花 梅花を
をる高や 新緑のうち白のそる
泥下の茶店すし
杉菜を摘みて食うれ
吉野の桜を
食うれと二人 旅ねをたのもき

孫子やあるらん 入るは新さふき
三河の小風寺を資産のおとろ伝
は西山茶をふるとの寺二ヶ所
杉菜ひたる 新もち 旅寄うる
李こいう表の悼
うりきふる 蔵国や宗和濃
元起和尚を酒を勧るこの子
をうる

多賀くに寄入るかを免仏
仏化の父の追善
神のいろうれる 雲嵐
法朝の国華をさ 魚の店

葛白く咲ひえてるさまこの頃
然国うち
海をうく野の奇ほのうの白し
葉名古屋を導うく
名牡丹名名をよ雲はほくまれ
一ひらのめくるひるし川名名
秋さんハ　牡丹の里　信陵君
花のてのう　笠さまん　ちの降日
星時は関を天とも時手る
杜国を待ひる名すの
名ひらつ尺付くら縁いこと時
鷺子はまみきめくし野の足

杜国不幸を作良吉時子男子鷺
はをを杜国をはかすまて
笠くくくくつの鷺子作のまき
時事の滝を
すくみゆくや言上子はるかはしし
生みのうひるれは嵐うか
花家様ちかの山家集
秋鶏子ふくくくの
一家くくくいさぬ菊の水　言葉
芹焼やすて梅の国弁の麻水
瓶られる秋の水　水は秋を名れ
十二月九日　伊賀の柳山

[illegible]
曾良行うて八代の方に出でんとす
屋をとりて新町の方に詩つとめて
糸をひき物いとまなきに
たすけとなる事をみて松尾芭蕉
杖をたく性質をあはれむ人こそ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

閑居箴

酒の免いはく行ふるの要
吟海雲業言亭にて
京にて八幡山の雪
越国浦浜の後
慶真寺張り清し雪の雨
古寺の梵鐘を思ひ出で越人を訪ふ
二人尺一雪にて雪ふるの
憐情深霧旅
雪おや行ふの花の前
いまこの八雪尺を持ふ雪にて
山中に多作を遊ひて

雪の日千鬼の後れ盛つて経
元禄己卯春良大佛再興
そろ雪や いつ川 丈佛 お柱こて
初雪や 稚 小 信仏 茂のいろ
林のう音の注人とまん安とさ雪
経て光の後志摩の里千住
ものて大津松本の多有とと
老尾の浮ふ雪ふ行ふの外と後
出ふ住みて林ふ雪ふれハ
お降の尾 れ雪 や志賀の雪
湖水概要
北良三上雪ふ雪を後の橋

大雲や清くひとく住義の家
三秋を孤さく深川の幽庵る物きれい
旧友門人多くに集うて来るいのもと
四ハとく人付る
とものくもるやきの枯尾花
ちぢみ玉鉢も雪の明るれ
小所の画賛
たふとさやきを降ぬるみのと望
草庵千士所
本歌の所ふるぬるやるの雪
深川大橋茶屋
新雪やうけかるる橋の上

新雪や月仙の業はたるむやて
竹の画賛
あるるみをいはるきの外の雪きか
湖月ものくもるくくの汐きの雪
雪月の清めの武江茶
新雪や神を祭るのるの寸うれ
深川大橋茶屋
きるるやいるいるふむ橋の雪
歌すのるるの竹小するるるのの
かるくくと打るる清し外の雪
去歳四友子を送る餞会おてのる
雪を詠て湛跋ひくかるく送るる

稽田の家の花見るゆふべ

かりそめ紅葉山の神の社の雲
紙子にも雲やこのとまれて尺し

杜鵑を弱の方

さみだれ八つて蒼くもれる社の君
麦生てよそ焼けむ
菅の葉社かもてたきそうたる雲
少やはしくて樹木悲伝ふ(いの)
いいつのはそうく
くすくのむさくるも雲の枕
吉野伐を志のいて
雲のうちもてしと伏る火桶

行くの秋の去るよりおそる火桶
少年をとうもくるく人を射す
埋火もきえやはのみそる知と
きりくすくるまれまる時火焼
住つのあ秋のうちや夏火焼
秋うの母高良の法印うこうれ

出家旅館

埋火や聖をよ
五つむ川茅のうち
夏鶯菊の鏡
稚うちやしぬ

十二月九日二井亭にて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

明能とやの渡を寒の中
月花の為に減さん事を入
かゝれとゝ波の音のかゝつゝ
事なれぬ笠を笠なる難を思ふ

自好歳

おもふ人は数にも入る光の雪

函嶺

めく事や海ゝ新に少れるつゝ
うの山と事ふる人や古磨
事なれ三人ふる空嘗うれ
蝶掃や雪めく富の寄いき
年の市線を寄ひ山ふ

月のさゝくしきし事のうれ
旅宿ふるやゆの雪の雪
旅行
蝶掃の枝の本写れ嵐う事
ふる紅ハ初の柄つる大工うれ

宗雪の句

古伏しや猫の陸千位年の雪
ぬすみ人手ひかゝ板ひ年おこ
仏千は波の市ゆく 彩
五百尤元旅の紅ふ
ふれ立ふふ紅波
芸雪春の本れハ風雪波れ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

約束を違ひ枝葉を伐り
酒のみ狂ひ人の絶て
月花を忘れて海のひひきに
貞徳宗鑑守武画像
三羽の鳥は特の天立をうけ心直を
業果て侍ぬ遊んもの後の術
元をゆふうさ森や
月花のあらはれやすとの有り蓮
慈光生
此椿か学び椿は本の
四山の緑
物ひとり孤ふ

和粉画像とゆわれハ新宮の名を岸
餅の花やかさしまさるるよめら哉
大寺の秋めすみよひら
梅干干のうゑ実をゆゑ殺ゆ
幸時狩庵
路花の酒白よ跡ゑり牡丹律
栗屋時景
さて秋ゑ人の俳ゑ市の寄
矢橋肉帆
ゑのうみ赤石の海を帆の寄て
比良雪重
さてく雲白衣めて猶比良の雪

石山秋月
ゆやの秋ゆ月ゑ此秋の月
淑子夕思
まてゑらゑかゑのゑ網の寄網
望月義房
ゑの文かゑゑ月ゑ片便宜
三井晩隆
ゑゑて花ハ一花の種
右八景八宗房の時の吟ゑと云
九のゑきれ寄秋市中ゑ住ゑひて屋を
源川の寄ゑに鶴ゑ長安ゑ古来名利の

[illegible]

[illegible]

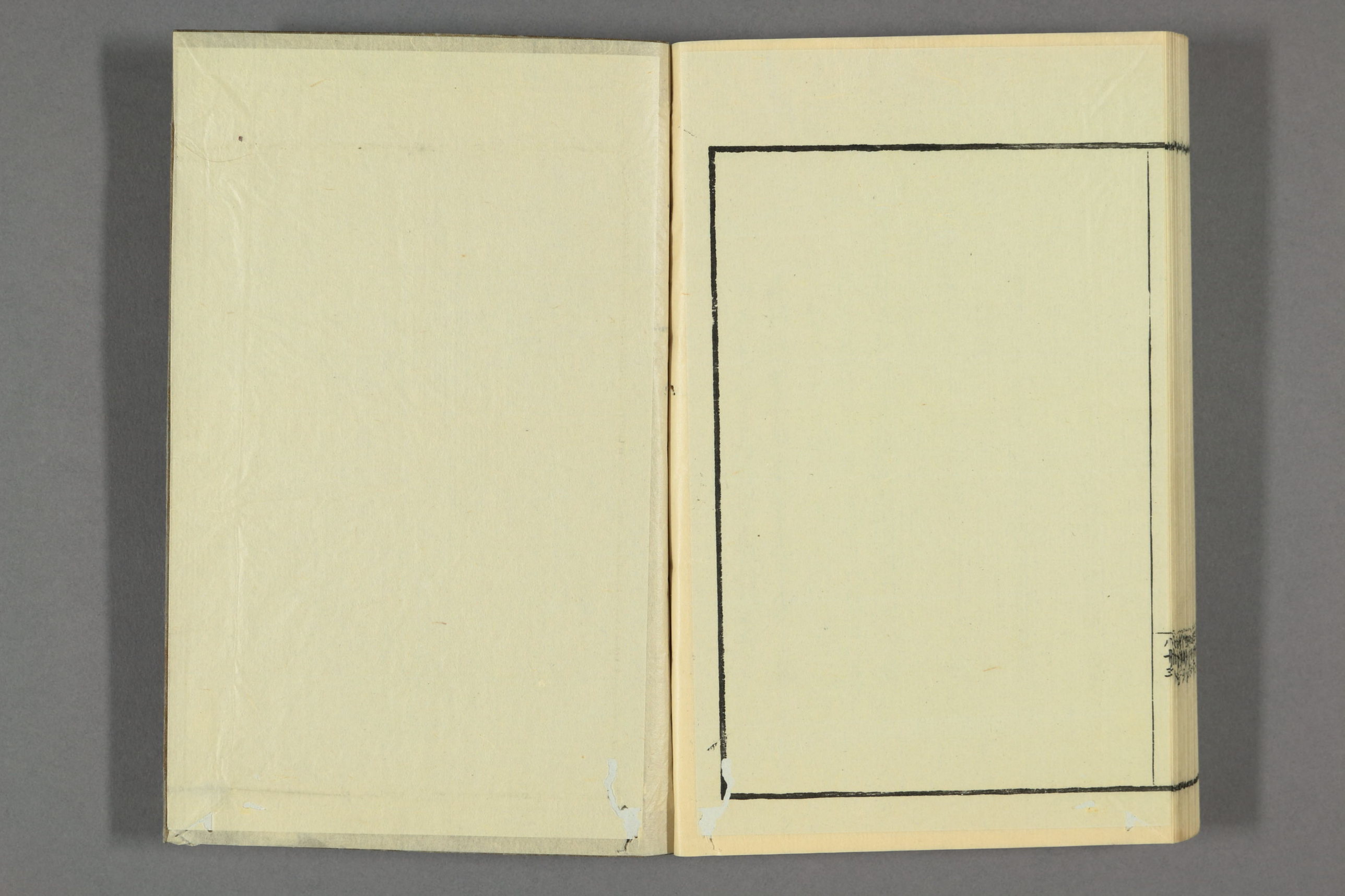
[illegible]

清鳥

三十里尾張大相の[illegible]

画賛

[illegible]

[illegible]

[illegible]